

歴史を読み解く : さまざまな史料と視角

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授 : 日本史

<https://hdl.handle.net/2324/17117>

出版情報 : 歴史を読み解く : さまざまな史料と視角, 2003-11. 青史出版
バージョン :
権利関係 :

ガイダンス

1 文永十一年・冬の嵐

蒙古襲来前段、文永の役で、蒙古軍が上陸した夜に嵐が襲ったという。翌朝には蒙古軍が博多湾から姿を消したとされているが、このことは『八幡愚童訓』以外の史料の記述にはみえない。『愚童訓』は八幡神の靈驗記であり、実録ではない。実際には嵐はその夜に吹いてはいない。蒙古軍の撤退もしばらくあとだった。『愚童訓』は嵐ではなく、神が戦つて、撃退したとする。冬の季節風に日本海交通は遮断される。蒙古・高麗軍にとつて、それ以前に撤退することは、当初よりおりこみ済みの行動だった。

2 カタアラシの語義と二毛作の起源

カタアラシは研究史では地力ちりよくがないために隔年に休耕せざるをえない田とされてきた。しかしいまもカタアラシのことばが使われる地方がある。三重県多気町では麦を作らない一毛作田を意味している。戸田芳実よしみは『古事類苑こじるいえん』の誤植を踏襲したため、カタアラシを読んだ和歌の情景を誤った。和歌でのカタアラシも冬季に麦を作らず休む田のことである。漢字の田は中国では畑の意味で、律令(唐令)の「易田えきでん」も畑である。毎年作り替える畑の意味なのに、日本ではそれを田に適用しようとしたから、混乱が生じた。カタアラシの語は背景にある二毛作の存在を想定させる。二毛作の初見は従来いわれてきたよりは二五〇年ほど早く、『菅家文草かんけぶんそう』(九〇〇)の「麦田千畝に遠し」、あるいは嘉祥二年(八四九)木

簡かん（石川県津幡町加茂遺跡出土）にみる「五月までに田植を終えて報告せよ」との規定の背景に見ることが出来る。

3 久安四年、有明海にきた孔雀

『長秋記』・長承二年（一一三三）に肥前国神崎庄かみさきに宋船が到着したとある。これは有明海への入港を指すのか、博多を指すのか、見解がわかれている。久安四年（一一四八）、同じ肥前国の杵嶋庄から孔雀が献上された事件は、従来まったく注目されてこなかった。むしろ有明海への宋船の入港を語る。中国・明の日本解説書に書き上げられた港津は有明海にも多い。それらは河口津であり、筑後川の河口には神崎庄津たる蒲田津（蓮池）ほか多数があった。潮の干満を利用でき、かつ干潮時にも水深のある河口津が中世港津の適地であった。博多津だけが日宋貿易における唯一絶対の港津であったわけではない。

4 鹿ヶ谷事件ししがだにと源頼朝

従来『平家物語』の記述によつて、鹿ヶ谷事件（治承元年・一一七七）は利那的で発作的な事件であるかのように認識されてきた。いわば『平家物語』史観である。宗像むなかた大社文書の元暦元年（一一八四）源頼朝書状は「前尾張少将」に肥前国晴氣保地頭職を与えた内容だが、この人物は鹿ヶ谷事件首謀者・藤原成親の弟、盛頼（藤原定家の姉婿）であった。鹿ヶ谷事件関係者である平康頼への恩賞授与のケースと、盛頼への恩賞は同じ理由と考えられる。類推すると、頼朝は成親から何らかの庇護を得ており、平家打倒の武力として期待されていた。恩賞は不遇な時代の保護に報いるものであろう。鹿ヶ谷事件は単発

的・局所的なものとはいえず、治承・頼朝挙兵の伏線であった。

5 南北朝内乱と家の交替

後の史料では連綿と続いているかのように記述される武士の家の歴史だが、実際には南北朝期に庶子家が台頭して、惣領家に替わるケースが多い。そこまでいかなくとも惣領家の安定支配が崩れたところも多かった。そのことが現地調査で確認できる例を紹介する。彼らの本拠地や菩提寺の調査、あるいは彼らが支配していた領域を確定することによって、実際の支配地域の広さや本当の拠点など真相が明らかになるからだ。相良家、仁保（平子）家、熊谷家、山内首藤家を素材とした。

6 風土と歴史——筑後川下流域のシオ（アオ）灌漑——

有明海が満潮になると、河川も影響を受けて水位が上がる。河川内の水は真水だから、大潮にその水をホリ（クリーク）にため込み、水車で揚水し、田を灌漑した。シオ灌漑とかアオ灌漑と呼ぶ。これを高度で不安定な技術とみなす研究者が多いが、三根郡西島村、神崎庄、三瀧庄をはじめ、中世文書にはこうしたシオ灌漑地域の村が多数登場する。光浄寺文書（佐賀県三根町）の南北朝期の史料には地名「高汐入」も見られる。自然状態でも月に二度真水が江湖を遡ってくる。人工的な装置を設けて保水力を向上させた。それがシオ灌漑で、歴史は古く、この地域の稲作とほぼ同時に始まっていたと考えた。

7 福岡城に天守閣はあったのか

黒田如水^{じすい}の福岡城に天守閣はなかったというのが定説だが、近年紹介された元和六年（二六二〇）の肥後細川家史料に「福岡の天守」とあることから、初期五重天守存在説が主張されるようになった。しかし正保絵図をみると、天守台よこに「矢倉跡」と書かれた場所がある。ここを福岡藩は中天守台・小天守台と呼んでいた。ここにあった矢倉は天守と称されていたが、正保以前、寛永段階の台風被害によって取り壊されたと考えられる。天守台そのものに「天守跡」なる記述はない。当初から大天守や矢倉（中天守台・小天守台）が揃ってあったとすると、通常はない二つの入口の天守になって、縄張（平面プラン）からも不自然となる。大天守はなかったが、のち天守機能は、切腹櫓^{やぐら}ともいわれた天守櫓^{くるわ}曲輪の建物が代用した。

8 原城の戦いを考え直す——新視点からの新構図——

四万人を超す人たちが籠城した原城のたたかい。原城は四周を海に囲まれ、キリシタンたちは絶望的な気持ちで戦った。多くの人々の中にあるこうしたイメージは本当なのか。籠城者たちが四方に使者を派遣して、一揆への同調、内乱状態を起こそうと意図したこと、幕府側もそうした事態を想定して対処したこと、すなわち海は外の世界につながっていたことを明らかにする。また幕府がオランダに命じて大砲を撃たせたことを手がかりとすれば、カソリック、プロテスタントの宗教戦争の図式をあてはめることができる。幕府・オランダは反カソリック（つまり反イエズス会）として一揆籠城方、そしてつながるポルトガルと対決した。

9 殉死者たちの墓碑から——虚実はあざなえる縄——

森鷗外の小説『阿部一族』で知られる熊本妙解寺・細川忠利殉死者たちの墓。阿部弥一右衛門の墓もそこにある。許可を得ずして切腹したという小説とは異なり、ここでは彼の死は藩公認の死とされている。しかし実際にはかれら殉死者は、忠利からも新藩主の光尚からも許可を得たわけではなかった。無許可の死が公認の死となり、やがては顕彰される。いまに残る史料はどこまで真実を伝えているのか。記されることのなかった殉死者たちの葛藤があつて、それが鷗外小説の原形とされる所伝になつたのではないか。